

子ども国際理解サマースクール

事業代表者：田巻松雄（国際学部附属多文化公共圏センター副センター長）

1. 事業の目的・意義

2016年8月8日と9日の2日間、宇都宮市教育委員会東生涯学習センターと国際学部附属多文化公共圏センターHANDS プロジェクト部門の協働で「子ども国際理解サマースクール」が行われました。本事業は、HANDS としては7度目となる多文化共生教育実践です。

受講者は、宇都宮市内の小学生4年生～6年生で、今年は、第1日目33名、第2日目34名、のべ67名の小学生たちが参加しました。

第1日目の目的は、毎年、一つの国や地域をテーマに取り上げ、子どもたちの目を世界に向けるきっかけづくりで、第2日目の目的は、宇大生の学生団体HANDS Jr や宇大留学生などの企画・支援のもと、かれらと直接交流しながら、参加小学生たちの国際感覚を養うことです。

2. 事業内容

(1) 参加型講義

第1日目：8月8日10時～12時

テーマ「世界を知ろう&世界から学ぼう 2016～タイ王国編～」

(2) 国際交流

第2日目：8月9日10時～14時

テーマ「世界を感じよう 2016～宇大留学生たちとの交流～」

3. 事業の進捗状況

(1) 第1日目

テーマ「世界を知ろう&世界から学ぼう 2016～タイ王国編～」

参加小学生33人、宇大生23人（HANDS Jr 等12人、田巻ゼミ生5人、タイからの留学生6人）

ゼミ生とタイからの留学生が中心となって、タイについて学びました。

まずは、アイスブレイクとして、名札に自分の名前をタイ文字で書いてみました。漢字とは全く

異なる文字に、みんな真剣でした。その名札は、記念に持ち帰りました。

2つ目のアイスブレイクとして、タイ語のカルタ取りをしました。「にわたりのゴー^ก」「子どものドー^ด」「カメのトー^ต」「魚のポー^ป」などと書かれたカルタで遊びました。

次に、タイ語でドラえもんの主題歌を歌いまし



た。何度も練習をして、「アン アン アン ラック ドラエモン ティー スッド ローイ」（アン アン とっても大好き ドラえもん）と最後には楽しく歌えるようになりました。

そして、タイの子どもたちの遊びをしました。1つ目は、「เสือกินคน สือกินคน」という鬼ごっこです。安全なエリアの草原から、人食い虎がいるエリアをとって反対側の草原まで、人食い虎役にタッチされずに進みます。タッチされた人は、人食い鬼役になりますので、どんどん虎が増えて、通りにくくなります。2つ目は、「คว่ำลูกโป่ง ครอบลูกโป่ง」という風船リレーです。グループ対抗で、風船をバトン代わりにし、その風船をフライ返しやほうきなどを使って転がして、一周して戻ってきたら、次の人へ交代するリレーです。これら2つの歓喜にわいた遊びをとおして、タイの同年代の子どもたちの遊びに触れ、また、小学生たちは、今日初めて会ったとは思えないほど、別の小学校に通う参加小学生と友好を育み、地域の大学生や留学生たちと交流することができ

ました。

最後は、田巻ゼミ生とタイの留学生たちによる脚本・出演による劇を2つ観覧しました。

1つ目の劇は、日本からお父さんの仕事の都合でタイに引っ越してきてタイの小学校に通うことになった晴香ちゃんが、タイの小学校で体験する異文化について紹介する劇です。晴香ちゃんのお父さん役には、田巻が演じました。タイでは、先生への宿題の提出には、右手だけで手渡すこと、国歌を歌う時間が朝の8時と夕方の6時に一日2回あること、休み時間にはみんなで牛乳を飲む時間があること、時間割にお坊さんによる仏教の授業があること、国王の誕生日の12月5日は国民は黄色い服を着て町に出て祝福するから宮殿の広場はたくさんの国民によって黄色に染まること等を、劇で教えてもらいました。補足説明は、スライドを使って留学生がわかりやすく解説しました。

2つ目の劇は、「晴香ちゃんとお坊さん」というタイトルで、タイの人々の心や生活の中にあるお坊さんへの畏敬の念について表現してくれました。タイの人々は、仏教を崇高なもの、そしてお坊さんを偉大な人と考えていることがよくわかりました。タイ語でタンブンという托鉢の場面では、女子の大学生が坊主頭のかつらをかぶりお坊さんの



役になり、小学生たちは、そのお坊さんに食べ物などを差し上げるタンブン体験をしました。どんなものでもありがたく受け取らなくてはいけないお坊さんたちの肥満傾向についても解説がありました。日本では、公共の乗り物には、お年寄り、

妊婦、障がいのある方々等に優先席がありますが、劇の中でのバスのシーンで、タイにそれらに加えてお坊さん専用の優先席があることを知り、みんな驚いていました。

最後に、タイの民族衣装を希望者に着てもらい、



みんなで集合写真を撮影しました。

(2) 第2日目

テーマ「世界を感じよう 2016 ～宇大留学生たちとの交流～」

参加小学生 34人、宇大生 27人 (HANDS Jr 等 17人、留学生 10人)

本学には、世界の33の国・地域から244名の留学生が学んでいます(本学学務部留学生・国際交流課調べ、2016年5月1日現在)。今回は、9つの国や地域出身の10名の留学生に協力を依頼しました。9つの国や地域とは、コスタリカ、ラオス、中国、モンゴル、ベトナム、タイ、ネパール、フィリピン、スリランカです。昨年に引き続き今回も、コスタリカ出身の留学生ロニー ホセさんが中心になって、ラオス、モンゴル、ベトナム、ネパール、フィリピンの5つの国や地域を中心に学ぶ交流内容を何日も何日も考えました。加えて、特にこの日のために、HANDS Jrという外国人児童生徒教育支援や国際理解活動に強い関心を持つ学生団体が熱心に企画・準備・運営しました。以下の5つの活動を中心に交流することができました。

①アイスブレイク

「新聞紙を使って AMIGO！」

まず児童を5つのグループに分け、広げた新聞紙1枚に各グループ何人乗れるか、全員が乗れるかを競い合います。普通に起立しただけですと、3人くらいしか紙上に乗ることはできませんが、「抱っこしよう」「おんぶしてみよう」などと、コミュニケーションをはかりながら協力することを学びます。中には、嬉しそうに留学生に肩車をしてもらっていた小学生もいました。

「じゃんけん列車で1 2 3」

英語でじゃんけんして、負けた方が、勝った人の後ろに回って、肩に手を乗せます。勝った人は対戦相手を見つけ、また英語でじゃんけんします。それを繰り返していくと、最後には、全員による大きな輪ができます。「Rock, Scissors, Paper. One, Two, Three!」というじゃんけんが会場のあちらこちらで繰り返され、勝った方の歓声が大きく響いていました。

「世界の国のコンニチハ」

3名の留学生から母語（ネパール語、タイ語、スペイン語）でのあいさつを学びました。例えば、ネパールのスディプさんには、あいさつ「ナマステ」の方法を教わりました。「おはよう」「こんにちは」「こんばんは」「さようなら」、これらすべて「ナマステ」一つで済むようで、その際にする深いお辞儀の仕方を教えてもらいました。

②交流ゲームA「スプーンレース」

手に持ったスプーンにピンポン球を乗せて10メートルの距離を往復するグループ対抗レースです。ピンポンの“バトン”が渡ると、落とさないように慎重になりつつも、どのチームも1位を目指してゴールまでがんばりました。

③交流ゲームB「ピックザボール」

まず、児童たちは指示だしワークシートで、各言語での指示の言い方を学びます。先述の5つの国や地域の言語であるラオス語・モンゴル語・フィリピン語・ネパール語・シンハラ語（スリランカの言葉）で、「前」「後」「右」「左」「止まれ」「前に進め！！」「後ろに下がれ！！」を学習しますが、普段耳慣れない言語に悪戦苦闘していました。その後、

学習したそれらの言葉を使ってゲームを始めます。目隠しをした各グループの代表留学生に各言語（チーム別）で指示を与え、スタート位置から10メートル先の円の中にあるボールを拾い、スタート位置にあるカゴにまでそのボールを入れます。できるだけ多くボールを制限時間以内に入れられるかを競います。4色あるボールの色で得点が変わりますが、留学生は目隠ししているため、各言語での指示の正確さが得点を大きく左右します。



④国際理解ゲーム「4 Corners Quiz」

パワーポイントを使って、留学生の出身国ごとに4択クイズを出題しました。日本との位置関係についての出題やその国で有名な料理を選ぶクイズなど、留学生たちが用意した問題が出されました。児童が正解だと思う答えのコーナーに移動してもらい、正解を発表し、留学生による補足説明を行いました。例えば、「この中から、日本が最も多くフィリピンから買っているのはどれでしょうか？」の問いに、「A:ヤシ油、B:マンゴー、C:マ

グロ、D:エビ」から答えを選び、Aだと思う人はAのコーナーに行きます。当たれば、のちにポイント換算するシールをもらえます。すぐにわかってしまう問題もあれば、私たち大人もどれだろうと少し悩む問題もありました。

閉校式では、宇都宮市東生涯学習センターの水沼栄所長と宇都宮大学国際学部附属多文化公共圏センターの田巻松雄副センター長よりあいさついただきました。解散後、留学生たちに駆け寄ってあいさつしたり、握手をしたり、別れを名残惜しそうにしていた児童たちを見て、この交流の目的を達成できたのではないかと思います。

4. 事業の成果

参加小学生からは、本スクールに対して概ね高い評価が得られました。アンケート結果の内容等から、タイ王国をテーマとする参加型授業と本学留学生との交流事業に参加したことで、参加小学生の国際的な関心や国際感覚が大いに増大したと判断されます。また、本学留学生と日本人学生は本スクールの企画・運営を担ったことで、実践的な国際理解教育を推進する力を向上させました。参観いただいた保護者の方々からも非常に有意義なイベントだとの評価をいただきました。



5. 今後の展望

国際的な視野や感覚を養い、多文化共生教育実践は初等・中等教育で益々重要となっております。しかし、学校単独での教育実践はなかなか進んでいないのが実情です。従って、この様なスクールの重要性は極めて高いと言えます。今回も、本ス

クールへの参加希望者は定員を大きく上回り、抽選をせざるを得ない状況でした。そして、参加者からは概ね高い評価を得てきました。リピーターも何人か出ています。この大きな理由は、学校現場での国際理解教育がまだ少ないことに加え、本スクールでは、大学と行政が協力連携しながら何度も協議を重ねて用意周到に計画を立て実施してきたことにあります。また、近年、小学校でも英語教育が取り入れられ、アメリカをはじめとする英語圏の異文化理解や交流は進んでいるものの、英語圏以外、とりわけアジアの文化に目を向ける機会にはあまり恵まれていない小学生にとって、国際的な問題関心と国際感覚を養う貴重な場となっており、参加大学生にとっては実践的な国際理解教育を経験する貴重な場となっています。国際学部の学生・大学院生、留学生と学生団体 HANDS Jr の人的資源等を活かした効果的な地域貢献・人材育成事業となっており、今後も継続的に実施していきたいです。